

私は学生時代に、その後私の上司になる方が言った「君の描いたものが世界に残る」という言葉に惹かれ、それまで漠然と描いていた空間デザイナーになる道から方針転換し、建設コンサルタントの道を選びました。社会人になってからは、「景観はどのように認知されるか」「美しい景観とは何か」を研究しながら、それを計画・設計業務に反映する機会をいただきました。サイコベクトルやフラクタル、光の反射や色彩等、線や形の認識のされ方や自然界における形の成り立ちに関する基礎的な知識や技術は仕事を通して学ぶことができました。

「美しい景観」を守る・つくる・育てることを切り口に、仕事の分野はランドスケープから都市計画、観光、冬季オリンピックや北海道新幹線を契機とするまちづくりへと展開してきました。技術士の専門分野である「都市及び地方計画」に必要な知識や技術は、仕事を通して会得してきました。

私は現在、北海道で働いていますが、四季折々に原始的で美しい自然景観を見ることができます。それは「この自然を守りたい」と願う人の意思の賜物であり、エンジニアの一人としてこれからも守り続けていくことに責任を感じています。また、手つかずの自然も美しいのですが、雄大な丘陵地に広がる田園景観も美しい。田園景観は、生き生きとした営みがあるからこそ美しく、営みがなくなれば景観の美しさも損なわれていきます。今、私たちはコロナ禍の中にいますが、このような中でも適切な営みを継続していくことが強く求められています。新しい世界観の中でも進むべき方向をしっかりと見極め、社会課題の解決に向けてひとつずつ丁寧に取り組んでいきたいと考えています。

宮崎 栄一郎(みやざき えいいちろう)

●建設部門(都市及び地方計画)

勤務先

パシフィックコンサルタンツ株式会社



→次号は、高森篤志さん(建設部門)

1960年に札幌で生まれ1985年に当時の(財)北海道農業近代化コンサルタントに採用されました。1999年にルーラルエンジニアに転籍し、2003年に技術士を取得、以来17年が経過しました。農業農村整備事業に携わってからは、36年が過ぎようとしています。2020年の3月、還暦を迎え、同時に「おじいちゃん」になることも出来ました。この36年間でトランシットは光波からGPSやドローンに変化しました。マイラーに定規で線を引き、青焼きで複写したものが、今やCADで3Dです。器材やパソコンの進歩のたびに、私たちの仕事のやり方は変わっていきました。

そして2020年2月末、突然の「コロナの時代」の到来です。人と人との接触の機会が激減し、テレワークや時差出勤などの対策のため、社員同士のコミュニケーションも希薄になりました。

しかし、どんな時代でも『技術力』が求められていることは変わりません。そしてその技術力は、知識と経験と想像力によって成り立つと思います。現在では、器材やパソコンの進歩により簡単に答えが出てしまっていますが、その現場にとって「本当に適正な答えなのか？」を考える必要があります。

時間が流れ先輩たちが引退し、今度は自分が教える側に立った時、若い社員に何を伝えるか、どうやって技術や経験を引き継いでいくか、経営者の一人として試行錯誤を繰り返す毎日です。

全てがAIに取って代わるまでには、まだ時間が必要です。人と人とのコミュニケーションが経験をつなぎ、技術をつないで、そこから想像力も生まれるはず。やがて来るAI時代にも人間の存在を誇示できるよう、微力ながら努力を続けたいと思います。

薄 正士(すずき まさし)

●農業部門(農業土木)

勤務先

株式会社 ルーラルエンジニア



→次号は、引地庸介さん(農業部門)